スペイン比較心理学会第 11 回大会に参加して

関西学院大学 中島定彦

Report of the 11 th Meeting of the Spanish Society of Comparative Psychology

SADAHIKO NAKAJIMA

*Department of Psychology, Kwansei Gakuin University,
Nishinomiya 662-8501*

動物の条件づけ研究の領域では、*Journal of Experimental Psychology : Animal Behavior Processes (JEP : ABP)*, *Quarterly Journal of Experimental Psychology : Comparative and Physiological Psychology*, *Animal Learning & Behavior*, *Learning and Motivation* といった国際的な専門誌にスペインの研究者の論文が掲載される頻度が近年目立って増えてきている。最近 5 年間 (1994~1998 年) にこれらの雑誌に掲載された論文のうち、少なくとも 22 篇にスペイン人研究者が関与しており、日本人の 15 篇よりも多い。英国の著名研究者との共同研究も多く、スペインでの研究を無視してこの領域の現状を把握することは困難になってきた。このたび、スペイン比較心理学会 (Sociedad Española de Psicología Comparada) の年次大会に参加する機会を得たので、かの地の研究とそれを生み出す環境について報告したい。

ハエン大学の Juan Manuel Rosas 博士から、スペイン比較心理学会の次期大会を同校主催で行うから参加しないか、との電子メールを受け取ったのは 1999 年 3 月のことだった。彼とはかつて米国ペンシルベニア大学の Robert Rescorla 教授の研究室で机を並べた仲であり、大会の特別講演者として Rescorla 教授を招くというので、クラス会に出席する気分で参加を決めた。Rescorla 教授の他に、文脈研究で著名なバーモント大学の Mark Bouton 教授 (現在、

JEP : ABP 誌の編集長)、誘因対比研究の権威ラトガース大学の Charles Flaherty 教授も特別講演を行うという。

スペイン比較心理学会第 11 回大会は、同年 9 月 20~22 日の間、ハエン県北部の町バエサにあるルネサンス様式の由緒ある建物 (アングルシア国際大学所有) を借りて開かれた。参加者はスペイン・英国・米国・メキシコ・ベルギー・日本から 110 名、ポスター発表 28 件、口頭発表 45 件、特別講演 4 件 (上述の米国人 3 教授の講演と Victor Garcia-Hoz マドリッド大学教授の Pavlov 生誕 150 周年記念講演) であり、平行プログラムを組まずに行われたので、朝 10 時頃から夜 7 時過ぎまで 3 日間ぎっしり詰まったスケジュールであった。

口頭発表はいくつかのセッションに分かれていたが、各セッションの題目をあげるだけで、この大会の模様が把握できよう。それらは、“Extinction and Inhibition” “Stimulus and Outcome Processing” “Learning about Context” “Causal and Predictive Learning” “Discriminative Learning in Animals” “Discriminative Learning in Humans” “Neurobiology of Learning” “Adjunctive Behavior and Classical Conditioning” “Spatial Learning” “A Look to the Beginnings” であり、動物心理学史を扱った最後のセッションを除けば、すべて伝統的な学習心理学がテーマであった。しかも、

その大多数が連合的アプローチによる条件づけ研究である。ポスター発表を含めても、エソロジーや発達・情動・社会行動といったテーマの研究はほとんどない。生理・薬理系の研究もほぼすべて連合学習に関連するものであった。実験的行動分析の立場からなされた研究はわずかに4～5件、知覚・記憶・概念学習といった動物認知科学系の発表は皆無であった。

このように書くと、読者は「日本では斜陽で右肩下がりにある伝統的な学習心理学研究（友永, 1999）がスペインではいまだに生き残っているのか」との印象を持つかもしれない。しかし、大会の回数からも分かるように、スペイン比較心理学会は大変若い学会で、10年余りの歴史しかないのである。従って、伝統的な学習心理学が西欧の果ての国で存続しているという認識は正しくない。実は、スペインの研究者の英国留学などを切っ掛けとして十数年前に始まった英国の連合学習心理学の輸入が学会設立の契機であるという。以後、Nicholas Mackintosh, Geoffrey Hall, John Pearce といった著名な英国の連合心理学者がスペインを訪れ、共同研究を行い、大学院生や博士研究員を英国に受け入れるという関係が続いている（今回あいにく、Mackintosh と Pearce の両教授は大会に出席できなかったが、Hall 教授は Charlotte Bonardi 博士を初めとする若手研究者とともに大会を盛り上げていた）。近年、条件づけの分野でスペインの研究者が活躍している背景には、このような事情がある。

非常に偏った発展を遂げているともいえるが、条件づけを専門とする者からすれば大変うらやましい環境である。日本はいうまでもなく、米国でも英国でもこれほど多くの条件づけ研究の発表を目にする大会はない。口頭発表の約4分の3はスペイン語（残りは英語）であったが、スペイン語の発表でもパワーポイントやOHPで呈示される視覚資料では英語を用いたものが

約3分の1あった。また、前述のように、発表のほぼ全てが連合学習（条件づけ）であり、視覚資料がスペイン語でもAX+, A-といった世界共通の業界表記がなされていると大まかな内容を把握できたため、スペイン語がわからなくても口頭発表の4分の3は理解することができた。

各研究発表から得たものは大きかったが、Rosas 博士から聞いたスペイン比較心理学会の運営システムにも感心した。スペイン比較心理学会には学会誌がなく、なんと年会費もない。また、誰が会員であるかもわからないし、当然会員数もわからないという。学会誌を出さず会員管理をしないので経費がかからないから、年会費は不要なわけである。年次大会は開催校が独立採算で開き、会員への各種通知は事務局のホームページ (<http://www.ugr.es/~pipsico/sepc.htm>) に掲載されたり、知人間・研究室間の電子メールのやりとりで行われている。ホームページ運営に関する作業は事務局のボランティアであるが、日本の学会事務局の業務に比べればさほど大きな負担でなかろう。「会員数・会員名を把握せず、会費もない学会」という概念には驚いたが、コンピュータネットワークが発達した現代ではそれで十分に機能することを教えられた。

2000年度の大会はグラナダで開催される予定である。日本からの参加も歓迎するという。朝夕のコーヒープレイクと午後遅くに始まる昼食会、そして深夜の飲み会では視界をさえぎるほどのタバコの煙に耐える必要があるが、そこで交わされる会話は大変有益である。

引用文献

- 友永雅己 1999 書評：藤田和生著『比較認知科学への招待—「こころ」の進化学—』科学, 69, 417-418.